

田畠文化と 心通わせ

(75)
村田 佳子



新年度を迎えて人事異動などで新しい環境に移つた方も多いでしょう。

新しい環境は新鮮であると同時に雰囲気で多少の違和感を覚えたり、中に

は「この人、感じ悪いな」という気持

つかないでいたり、またおもしれ

内が経営する幼稚園を手伝え、将来は心理学を勉強して子供たちを助ける専門家になりたいと夢を語ってくれました。

帰国して一年半が過ぎて

なるといつのはうで

たところ、ハンブルクに住

る彼女を訪ねました。そ

の後も相変わらず彼女

は愛想がないわけでもな

く、それでもハンチに誘

つてくれたり学校帰りに

一緒にピーチで

私が訪ねた日はちょうど

ドイツ再統一の記念日で

お互いに生い立

ちや将来の夢な

ども語り合つよ

うなままでした。

彼女の料理を選ぶ姿や歌

と話しました。

翌日、彼女は仕事に出

かけ、私は一人自転車を

借り秋のハンブルクを観

光しました。「遅くなる

から先に帰つて」と言

ふみを押しつけていたの

です。彼女こそ緊張して

いたかもしれません。

彼女はとても自然で無理

つていました。「つけ

つけなどだったかな…」

などと笑いながら正直

な人で愛情にあふれた人

や、「ドロボウ?」。恐る

だつたところを知り

ました。

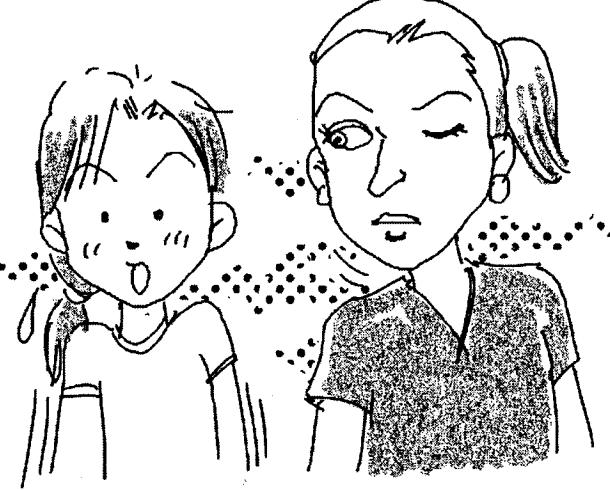
「最悪な初対面」をし

てしまつても意外とこれ

で、日本食に興味をもつて、

日本食の優しさを感じ

ました。彼女がその日選



新年度初対面が最悪でも…

たくさんの方との「初対面」を経験しましたが、スザンと、女性との出合いが心に残っています。場所はオーストラリアのオーストラリアの下級生の間で私の顔を凝視する声、無表情。クールな青い瞳で私の顔を凝視する表を突かれた私は怖い先輩に殴られた下級生のよう」固まり、裏返して、「ジャバーン!」と答えてしまいました。「普通、二つ口」と笑いました。

元の東ドイツ出身という彼女は大学入学を4年間待ち続けていました。ドイツは当時授業料が無料で試験に通っていても入学の順番を待たなくてはいけないのでした。その間、彼女は力なく3ヶ月間海外留学するといつを3年続けていたのです。その年はまたオーストラリアを選んだのでした。子供のころテレビはなく、夜は暗い部屋で小さな電灯と辞書を頼りに英語の本をよく読んでいたそうです。身

誕生日を覚えていてくれました。

ア、教室でした。私たちの虫で思ひたものの、授業が始まると「え」とから来たのです。ドイツは誰も「うん」と説いてくれたり学校帰りに一緒にピーチで私が訪ねた日はちょうどドイツ再統一の記念日で、そのうちお互いに生い立ちや将来の夢などを語り合つようになりました。壁が崩壊して、ドイツが再統一できただおかげで、彼女は対して「感じ悪」と話しました。

翌日、彼女は仕事に出かけ、私は一人自転車を借り秋のハンブルクを観光しました。「遅くなるから先に帰つて」と言ふみを押しつけていたの

です。彼女こそ緊張していたかもしれません。

彼女はとても自然で無理つっていました。「つけつけなどだったかな…」などと笑いながら正直な人で愛情にあふれた人や、「ドロボウ?」。恐るだつたところを知りました。

「最悪な初対面」をしてしまつても意外とこれで、日本食に興味をもつて、日本食の優しさを感じました。彼女がその日選んでくれました。

これが、田畠文化と心通わせの75回目でした。